

研究ノート

小学校教育実習に関する実習校の成績評価と実習生の自己成績評価の相違に関する検討 (3)

松本大輔・川上 貴・松井克行・佐藤範男

(西九州大学子ども学部子ども学科)

(平成28年1月29日受理)

A Consideration of self-evaluation by students with evaluation by schools in practice teaching of elementary school III

Daisuke MATSUMOTO, Takashi KAWAKAMI, Katsuyuki MATSUI, Norio SATOU

(*Department of Children's, Faculty of Children's Studies, Nishikyusyu University,*)

(Accepted January 29, 2016)

Abstract

The purpose of this study is to consider of Self-evaluation by Students with Evaluation by Schools in Practice Teaching of Elementary School.

As the main result were two points.

- 1) Basic behavior and attitude toward practice teaching is lower evaluation by school than by self-evaluation.
- 2) The reflection of the class is low evaluation by school and by self-evaluation.

In this study, It was revealed that it was necessary to educate student teachers' abilities lesson plan and study on teaching materials in future.

Key words : Practice Teaching of Elementary School 小学校教育実習
Evaluation by School 実習校評価
Self-evaluation by Students 自己評価

I. はじめに

地域との連携による教員養成を目指し、佐賀市と協定を結んだ本学の子ども学部においては、今後、一層、地域との結びつきを強くしていくために、実習指導の充実及び、実習参加に関する基準の設定と、送り出す実習生の質を高めるような指導を行う必要がある。

そこで本研究では、平成27年6月に行われた小学校教育実習における受け入れ先の実習校に対する成績評価と実習後の実習生の自己成績評価の結果を分析し結果を考察することで、今後の小学校教育実習指導改善への手がかりを得ることを目的とした。

II. 研究方法

1) 調査対象

平成27年6月に佐賀市にて小学校教育実習を行った本学4年生64名（実習生）及び、佐賀市内の小学校教育実習受け入れ先26校（実習校）を対象とした。有効回答数は実習生より58名、実習校より26校、64名分であった。

2) 調査内容

本調査では、実習校においては実習後、実習校から送られてきた実習生の教育実習の成績を判定する成績評価表を用いた。また実習生においては、実習直後、実習生が自ら自身の実習に対して自己評価という形で同じ成績評価表を自己成績評価表として用いた。成績評価表は、「基礎的事項」に関する4項目、「子ども理解及び学級経営」に関する4項目、「教科指導と学習評価」に関する10項目、「教科外の指導」に関する2項目の計20項目で構成されている（成績評価表は資料として付記した）。

3) 分析方法

成績評価表の各20項目は「極めて良好である」を5、「良好である」を4、「基準は満たしている」を3、「やや不十分である」を2、「不十分である」を1と点数化し、統計処理による分析を行った。

III. 結果と考察

1) 平成27年度の実習校の成績評価と実習生の自己成績評価から

表1は実習校の実習生64名分の成績評価と、実習生58名の自己成績評価の評点を評価観点及び合計得点として示したものである。

表1 平成27年度 実習校の成績評価と実習生の自己成績評価の評価観点及び評点合計に関する評点について

評価観点	実習校の成績評価の評点 ()内は100点 換算率	自己成績評価の評点 ()内は100点 換算率	t 値
基礎的事項 (4項目)	17.58 (88.8%)	18.29 (91.4%)	-2.02*
子ども理解 及び学級経営 (4項目)	15.92 (79.6%)	16.12 (80.6%)	-0.52
教科指導と 学習評価 (10項目)	38.75 (77.5%)	39.67 (79.34%)	-1.03
教科外の指導 (2項目)	7.69 (76.9%)	7.79 (77.9%)	-0.47
合計	79.94 (79.94%)	81.88 (81.88%)	-1.24

(* $p < 0.1$, * $p < 0.05$, ** $p < 0.01$, *** $p < 0.001$)

表1から全ての評価観点及び合計得点において実習校側の評価が自己評価よりも低いことが分析された。この傾向は昨年度と同様の傾向である。ただし、今年度は「子ども理解及び学級経営」、「教科指導と学習評価」、「教科外指導」の3観点及び合計得点には有意な差は見られなかった。その中で、実習に対する基礎的な姿勢や態度に関する「基礎的事項」が有意に評点が低いという結果になっている（5%水準）。昨年度の調査でも「基礎的事項」は有意に評点が低かった（1%水準）。昨年度よりはこの差は小さくなっているとはいえ、これらは実習生の実習に対する基礎的な姿勢や態度と実習校側の基礎的な姿勢や態度の認識の差異が実習生としての“当たり前”の姿勢の差異として考えられるため、今後の教育実習に対する課題の一つであると考えられる。

特に表2から「教職に対する使命感や責任感をもって、積極的に取り組むことができる」、「実習校教員と適切にコミュニケーションを取り、他の実習生と協力できる」、「児童と積極的にかかわろうとすることができる」の3項目が有意に低い。3項目とも実習校からの評点が4点を超えていることから、決して実習校からの評価が低いとは言えないが、「教職に対する使命感や責任感をもって、積極的に取り組むことができる」、「児童と積極的にかかわろうとすることができる」の2項目は昨年度も有意に低

表2 実習校と実習生の評価分析表

○目標達成状況及び得点について				
5. 極めて良好である	4. 良好である	3. 基準は満たしている	2. やや不十分である	1. 不十分である
○達成目標	実習校 M (SD)	実習生 M (SD)	t 値	
○基礎的事項				
1 教育実習の留意事項を全般的に守ることができる。	4.58 (0.56)	4.62 (0.52)	-0.43	
2 教職に対する使命感や責任感をもって、積極的に取り組むことができる。	4.25 (0.64)	4.44 (0.65)	-1.68 ⁺	
3 実習校教員と適切にコミュニケーションを取り、他の実習生と協力できる。	4.2 (0.65)	4.41 (0.75)	-1.66 ⁺	
4 児童と積極的にかかわろうとすることができる。	4.55 (0.62)	4.81 (0.48)	-2.62 ^{***}	
基礎的事項に関する得点 (4~20) 合計	17.58 (2.02)	18.29 (1.87)	-2.02 [*]	
○子ども理解及び学級経営				
1 児童の発達段階に応じて、コミュニケーションや対応ができる。	4.17 (0.61)	3.97 (0.65)	1.81 ⁺	
2 児童に公平に接し、児童を褒めること、叱ることができる。	3.78 (0.65)	4.16 (0.77)	-2.9 ^{**}	
3 担任教師が示す学級経営案について理解することができる。	4.08 (0.54)	4.16 (0.77)	-0.64	
4 学級経営案の理解に基づき、児童を指導しようとするすることができる。	3.89 (0.57)	3.84 (0.87)	-0.35	
子ども理解及び学級経営に関する得点 (4~20) 合計	15.92 (1.75)	16.12 (2.45)	-0.52	
○教科指導と学習評価				
◆学習指導の事前学習				
1 課題に応じて、学習指導案を積極的に作成しようとする。	4.01 (0.74)	4.14 (0.74)	-0.44	
2 指導を受け入れ、学習指導案の改善を図ることができる。	4.31 (0.66)	4.52 (0.66)	-1.71 ⁺	
◆学習指導の実施				
3 作成した学習指導案にしたがって、授業を展開することができる。	3.89 (0.65)	3.9 (0.83)	-0.44	
4 作成した学習指導案にしたがって、学習評価を実施することができる。	3.48 (0.53)	3.48 (0.84)	0.01	
5 板書や発言、ノートの指導、あるいは実技指導を適切に行うことができる。	3.64 (0.55)	3.57 (0.77)	0.6	
6 児童の反応に適切に対応しながら、学習指導を行うことができる。	3.86 (0.61)	3.84 (0.87)	0.22	
7 学級経営を意識して、具体的な学習指導を行おうとすることができる。	3.77 (0.56)	3.69 (0.75)	0.64	
8 必要に応じて、授業記録等を適切に作成することができる。	3.95 (0.65)	3.86 (1.02)	0.59	
◆学習指導の事後学習				
9 反省的考察の協議会等に参加し、積極的に意見を述べるすることができる。	3.78 (0.6)	4.41 (0.79)	-4.98 ^{***}	
10 授業を振り返り、改善点について述べたり、レポートを書いたりできる。	3.97 (0.56)	4.26 (0.76)	-2.4 [*]	
教科指導と学習評価に関する得点 (10~50) 合計	38.75 (4.36)	39.67 (5.56)	-1.03	
○教科外の指導				
1 教科外活動の目標や内容について理解する。	3.8 (0.54)	3.88 (0.7)	-0.73	
2 教科外活動のいずれかにおいて学習指導案を作成し指導することができる。	3.89 (0.62)	3.91 (0.88)	-0.17	
教科外の指導に関する得点 (2~10) 合計	7.69 (1.02)	7.79 (1.45)	-0.47	
評点合計				
秀 (90点以上) 優 (89~80点) 良 (79~70点) 可 (69~60点) 不可 (60点未満)	79.94 (7.73)	81.88 (9.52)	-1.24	

(*p<0.1, *p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001)

かった項目であることを考えれば、小学校教育実習指導の中、今一度、教職に対する使命感や責任感、実習に対する積極性や、コミュニケーション能力といった基礎的な部分に関して指導をより徹底していく必要はあろう。また、この調査とは別に行っている実習校からの意識調査の分析と合わせてそのズレ

について明らかにし、指導について検討していく必要がある。さらに20項目ごとに評点をまとめ分析したのが表2である。

表2から有意差が出た項目は、「基礎的事項」の「教職に対する使命感や責任感をもって、積極的に取り組むことができる」、「実習校教員と適切にコ

コミュニケーションを取り、他の実習生と協力できる」、
「児童と積極的にかかわろうとすることができる」
以外にも、「子ども理解及び学級経営」に関する4
項目から、「児童の発達段階に応じて、コミュニケーションや対応ができる」、「児童に公平接し、児童を褒めること、叱ることができる」、「児童に公平に接し、児童を褒めること、叱ることができる」の2項目、「教科指導と学習評価」に関する10項目から「指導を受け入れ、学習指導案の改善を図ることができる」、「反省的な考察の協議会等に参加し、積極的に意見を述べることができる」、「授業を振り返り、改善点について述べたり、レポートを書いたりできる」の3項目の合計10項目である。この中で、「児童の発達段階に応じて、コミュニケーションや対応ができる」という項目以外は全て実習校の評点のほうが低いという評価となった。

その中で、教材研究、授業実践、実践の省察という知識の活用力を伴う実践的な力量に寄与する重要な力であると考えられる「指導を受け入れ、学習指導案の改善を図ることができる」、「反省的な考察の協議会等に参加し、積極的に意見を述べるができる」、「授業を振り返り、改善点について述べたり、レポートを書いたりできる」の項目が、実習校の成績評価の評点が実習生の自己成績評価の評点よりも有意に低い項目であるが、この項目は実習生の自己成績評価においては4点越える高得点項目である。これは、実習生と実習校側における、授業の見方や、授業に対する反省、またそれをどのように活かすかという省察の部分の質的な差異であると考えられる。

これらの改善力や省察力に関する差異は、昨年度も同様の傾向であった。昨年度の傾向から小学校教育実習指導においては、模擬授業後の省察レポートの提出や、模擬授業参観者の授業参観レポートを、模擬授業演習の度に書かせ提出させるだけでなく、内容についても模擬授業後に検討会としてお互いに模擬授業について話し合いをさせるように改善してきたが、ただ形式的にレポートさせ提出させる、または話し合いを行うのではなく、改善した授業を再度模擬授業として行わせて改善点を提示させるなど、その内容を今後質的に高める指導を行う具体的な対策の必要があると考えられよう。またより質の高い実践を実際の小学校現場に参観に行きその授業について考えるなど、大学だけの学びにならないような改善も必要であるといえる。

また表2からは、「教科指導と学習評価」に関する

る項目の評点が他の評価観点の項目に比べ実習校の成績評価、実習生の自己成績評価ともに低いことも読み取れよう。これらも昨年と同様の傾向である。つまり授業力の育成は小学校教育実習指導の問題だけでなく、学科全体における教員養成の課題として、取り組むべき課題であるといえる。特に学習評価に関する項目と、板書や発言等の項目が、実習校、実習生ともに全項目の中で評点が最も低い項目となっている。これも昨年度同様の結果となっている。指導と内容と評価の一体化という授業づくりの基本から考えれば、これらは単なる学習評価独自の問題としてではなく、教材研究や学習指導案作成等の授業づくりの中での問題として捉え、今後の小学校教育実習指導の中で指導内容として、各教科指導法の指導内容として学科全体のカリキュラムの問題として検討していく課題であろう。

これまでの表1及び表2から、平成27年度の小学校教育実習においては、評価観点の評点、各評価項目、評点合計ともほとんどが実習生の自己成績評価よりも実習校の成績評価が低いということ、さらに「教科指導と学習評価」に関する項目の評点が他の評価観点の項目に比べ実習校の成績表、実習生の自己成績評価ともに低いことも読み取れた。これらを踏まえ省察力等を含む授業力に関する力を身につけさせていく事が重要であると考えられる。

2) 平成26年度の実習校の成績評価と実習校の自己成績評価と平成27年度の実習校の成績評価と実習校の自己成績評価から

表3は平成26年度と27年度の実習校の成績評価に

表3 平成26年度と27年度の実習校の成績評価比較

評価観点	平成26年度実習校の成績評価の評点 ()内は100点換算率	平成27年度実習校の成績評価の評点 ()内は100点換算率	t 値
基礎的事項 (4項目)	17.32 (86.6%)	17.58 (88.8%)	0.77
子ども理解 及び学級経営 (4項目)	15.86 (79.3%)	15.92 (79.6%)	0.21
教科指導と 学習評価 (10項目)	37.96 (75.9%)	38.75 (77.5%)	1.02
教科外の指導 (2項目)	7.74 (77.4%)	7.69 (76.9%)	-0.3
合計	78.87 (78.87%)	79.94 (79.94%)	0.79

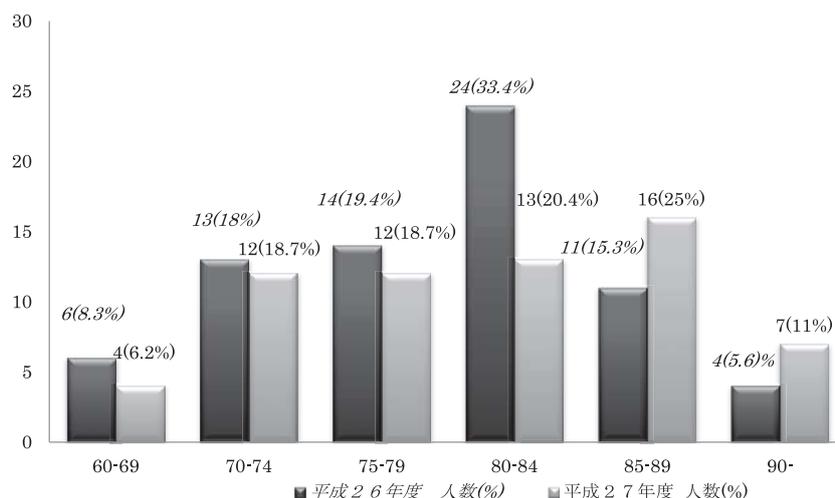


図1 平成26年度と平成27年度 成績評価の合計評点分布

における評価観点と合計評点の比較である。

表3からは有意差は認められなかったものの平成26年度にくらべ、平成27年度の実習校の成績評価の評点の方が「教科外の指導」以外の評価観点、合計評点ともに高いことが伺える。つまり、昨年度に比べ平成27年度の実習生の評価が高くなっているといえよう。特に、「教科指導と学習評価」の観点は、昨年度より一点近く高くなっている点の一つの成果として考えられよう。図1は成績評価の合計評点の分布図である。

各得点範囲の割合から比べると、80点未満の割合が減少し、85点以上の割合が増加しているのがわかる。つまり、実習校の評価としては昨年度より高くなったと考えられよう。ただし、70点未満の実習生が4名いることは、小学校教育実習に対する能力や熱意といった総合的な力量不足としての評点であると考えられる。これらの問題は今後、小学校教育実習指導における実践的指導力の向上を図るとするという内容の問題とともに、小学校教育実習参加に関する規定としての制度の問題も考えていく必要がないだろうか。

表4は平成26年度と27年度の実習生の自己成績評価における評価観点と合計評点の比較である。

表4からは、「教科外の指導」の観点以外は平成27年度の実習生の自己成績評価の評点の方が評価観点、合計評点ともに有意に高いこと明らかとなった。つまり、表3及び表4からは実習校の成績評価においても実習生の自己成績評価においても「教科外の指導」の観点以外は高まっているという関係が明らかとなった。

表4 平成26年度と27年度の実習生の自己成績評価比較

評価観点	平成26年度自己成績評価の評点()内は100点換算率	平成27年度自己成績評価の評点()内は100点換算率	t 値
基礎的事項(4項目)	18.22 (91.1%)	18.29 (91.4%)	2.2
子ども理解及び学級経営(4項目)	16.32 (81.5%)	16.12 (80.6%)	0.48
教科指導と学習評価(10項目)	38.93 (77.86%)	39.67 (79.34%)	0.79
教科外の指導(2項目)	8.04 (80.4%)	7.79 (77.9%)	-0.99
合計	81.51 (81.51%)	81.88 (81.88%)	0.22

以上の傾向は実習生の質の差異や、実習校における指導教員の評価基準に対する捉え方の差異等の問題として考えられ、一律な量的分析からは考察する事が難しい問題と考えられるが、小学校教育実習が4年目になり、本学科と実習校の実習生に対する考えが少しずつ合致してきているという傾向であるとも考えられる。今後、より詳細な分析やインタビュー及び記述等の質的な研究と併せて行う事で、小学校教育実習指導の指導内容の成果を考察する事が可能になると考えられる。

IV. おわりに

本研究では、平成27年6月に行われた小学校教育実習における受け入れ先の実習校に対しての成績評

価と実習後の実習生の自己成績評価の結果を分析し考察することで、今後の小学校教育実習指導改善への手がかりを得ることを目的とした。

その中で、表1から全ての評価観点及び合計得点から実習校側の評価の方が自己評価よりも低いことが明らかとなった。特に、実習に対する基礎的な姿勢や態度に関する「基礎的事項」においては昨年度よりはその差は小さくなったものの今年度も有意に評点が低く（5%水準）、この差異は今後の教育実習に対する大きな課題であるといえよう。この調査とは別に行っている実習校からの意識調査の分析と合わせてそのズレについて明らかにし、指導について検討していく必要がある。

表1及び表2から、平成27年度の小学校教育実習においては、また評価観点の評点、各評価項目、評点合計ともほとんどが実習生の自己成績評価よりも実習校の成績評価が低いということ、さらに「教科指導と学習評価」に関する項目の評点が他の評価観点の項目に比べ実習校の成績表、実習生の自己成績評価ともに低いことも読み取れた。これらを踏まえ今後も、小学校教育実習指導の中で、指導案作成、教材研究等の授業計画力や実際の授業場面での指導力の向上をこれまで以上に取り組んでいく必要があると考えられる。

また表3及び図1からは、有意な差はないものの、平成27年度の評価の方が、昨年度の評価よりも全体的に高いことが明らかとなった。また表4からは、昨年度に比べ、実習校の成績評価の傾向と実習生の自己成績評価の傾向が類似しており、徐々にではあるが、実習校と本学科の実習生に対する考え方が合致してきたともいえる。この傾向をより顕著にすることは、より小学校教育実習の質を高め、地域とともに育てるという本学科の小学校教育実習の目標に迫るものとなろう。

本研究は継続的に行う事により意味のある研究であると考えられる。次年度以降においても教育実習後の評価の相違を分析する事で実習校が求められる小学校教育実習生としての力量を小学校教育実習指導の中で育成するような小学校教育実習指導の指導内容を検討する事が可能になると考えられる。今年度で継続的な調査も、3年目を迎えている。今後、これらのデータをより活用しながら小学校教育実習の質を高めていくためにも、継続的に基礎的なデータを蓄積する事、分析されたデータと小学校教育実習指導の指導内容の成果と課題をより詳細に考察が

できる調査内容を検討する事が今後の課題であると考えられる。

資料 成績評価表

○目標達成状況及び得点について		
以下に記す目標達成の状況に応じて、5～1のいずれかに○を付す。その後、各項目の得点を合計し、「合計」欄に合計点を記入する。		
・5点 (極めて良好) ・4点 (良好) ・3点 (基準は満たしている) ・2点 (やや不十分) ・1点 (不十分)		
○基礎的事項		達成状況
1	教育実習の留意事項を全般的に守ることができる。	5・4・3・2・1
2	教職に対する使命感や責任感をもって、積極的に取り組むことができる。	5・4・3・2・1
3	実習校教員と適切にコミュニケーションを取り、他の実習生と協力できる。	5・4・3・2・1
4	児童と積極的にかかわることができる。	5・4・3・2・1
基礎的事項に関する得点(4～20)		合計 点
○子ども理解及び学級経営		
1	児童の発達段階に応じて、コミュニケーションや対応ができる。	5・4・3・2・1
2	児童に公平に接し、児童を褒めること、叱ることができる。	5・4・3・2・1
3	担任教師が示す学級経営案について理解することができる。	5・4・3・2・1
4	学級経営案の理解に基づき、児童を指導することができる。	5・4・3・2・1
子ども理解及び学級経営に関する得点(4～20)		合計 点
○教科指導		達成状況
◆学習指導の事前学習		
1	課題に応じて、学習指導案を積極的に作成しようとする。	5・4・3・2・1
2	指導を受け入れ、学習指導案の改善を図ることができる。	5・4・3・2・1
◆学習指導の実施		
3	作成した学習指導案にしたがって、授業を展開することができる。	5・4・3・2・1
4	作成した学習指導案の評価項目にしたがって、学習評価に取りくむことができる。	5・4・3・2・1
5	板書や発言、ノートの指導、あるいは実技指導を適切に行うことができる。	5・4・3・2・1
6	児童の反応に適切に対応しながら、学習指導を行うことができる。	5・4・3・2・1
7	学級経営を意識して、具体的な学習指導を行おうとすることができる。	5・4・3・2・1
8	必要に応じて、授業記録等を適切に作成することができる。	5・4・3・2・1
◆学習指導の事後学習		
9	反省的考察の協議会等に参加し、積極的に意見を述べるすることができる。	5・4・3・2・1
10	授業を振り返り、改善点について述べたり、レポートを書くことができる。	5・4・3・2・1
教科指導と学習評価に関する得点(10～50)		合計 点
○教科外の指導		
1	教科外活動の目標や内容について理解する。	5・4・3・2・1
2	教科外活動のいずれかにおいて学習指導案を作成し指導をすることができる。	5・4・3・2・1
教科外の指導に関する得点(2～10)		合計 点